スペインの水辺事情

清水建設株式会社土木本部土木第三部
（前研究第一部主任研究員）　犬伏　俊通

スペインは、かつて15世紀に栄華を極めたことがあり、その歴史的年輪を感じさせる水辺景観が今もあると同時に、水の少ない土地柄から水を非常に大切に扱った整備がなされている。今後のわが国の水辺空間整備に役立てることを目的に、平成元年10月20日から11月２日までの14日間にわたってスペインの水辺事情を視察した。以下、スペインの水辺事情の印象について述べることとする。

1. スペインには高い堤防が見られない。

スペインに限ったことではないが、地形条件の関係から堤防のある河川がほとんど無いということである。一方、わが国の河川はほとんどが堤防河川である。こう言ってしまえばそれだけのことだが、この違いはとても大きい。例えば、平野部をゆったり流れる大きな川、我々はそこに延々と続く緑の斜面（堤防）を思い浮かべるのではなかろうか。堤防は、そのほとんどが、人工的に作られたものであるにもかかわらず我々の原風景となっている。そして、そのことが、我々に堤防のない風景を想像することを困難にしている。利根川の河口に近いところでは、土地が川に向かって緩やかな斜面になっており堤防がない。その場所にたって川を眺めると、何か日常的でない空間の広がりを感じる。そう、それは主に欧米で見る水辺の風景なのである。都市部における景観あるいは環境向上が望まれる昨今、都市部の中のオープンスペースの価値はますます大きなものになるであろう。地価高騰で新たな土地を取得するのが困難な状況の中で、現状の土地所有を前提として河川空間とその沿川区域を一体的に再開発することは合理的であると考えられ、あらためてスーパー堤防の必要性を感じた次第である。

2. 水の少ない土地柄での多彩な演出

外国を旅行するたびに思うことは、大地の色は茶色であると言うことである。日本のそれはそのほとんどが緑に覆われていて、我々はそれが当り前と思っているが、逆に世界的に見るとめずらしいことである。今回視察した時期が秋で、有名なひまわりの収穫も終わっていたため、どこまでも続く茶色の大地は不気味でさえあった。しかし、それゆえ水に憧れ、水を大切にしている。町の至る所にある噴水、公園の森の中にある池、河川に沿ったプロムナード、それらすべてにスペイン人の水に対する思い入れが感じら

れる。例えば、上の写真はグラナダアルハンブラ宮殿・ヘネラリッフェ庭園内の階段であるが、手擦りの部分に小水路があり、そこを通る者は耳元のせせらぎの音を聞きながら歩くことになる。なんとも心憎い演出である。

昔、黄金の国ジパングと言われた日本にその時代から今日に至るまで変わらずにある天然の恵み、それは水である。高度経済成長期を経た今日の日本は最大限にそれを利用はしているが、果たして感謝をし、思いやりをもって接しているだろうか。経済的に繁栄し、余裕ができた今こそ水に対してもう一度考え直す良い機会ではないだろうか。

3. 豊かさを感じるような生活空間

現在の日本は、世界最大の債権国となった。まさに金持ちである。かたやスペインは、15世紀に世界に覇権を及ぼしたものの、今は当時と比較して低下している。しかし、かつて世界を支配した国には一朝一夕には出来ない社会資本の蓄積がある。オランダしかり。イギリスしかり。その街並は、数世紀たった今も我々の眼を引き付ける。下の写真は、バルセロナ・シウタデラ公園内の池である。そこにある彫刻の圧倒的な迫力！　これぞ本物とうならざるを得ない。

話を日本に戻そう。日本にも皇居・京都の鴨川等世界に誇れる景観が数々ある。要はいかに資金を、国民が豊かさを感じられるような生活空間形成のために使うかである。「安物買いの銭失い」にならぬようじっくり腰を落ち着けた整備をしたいものである。そのためには、日本が〝成金〟から本当の意味での〝豊かな金持ち〟にならなければならない。

4. おわりに

一人一人の〝ゆとり〟〝美観〟に対する確かな目こそわが国の都市景観を向上させる原動力である。そのためには、できるだけ多くの良い事例を見ることが必要であると痛切に感じた。美食せずして食通にはなれないのかもしれない。